

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いつか書いたことがあるが、人間はまず自分の好きなことをすることが大切である。好きと感
ことを行なううちに、新しい世界が広がってくる。と言っても、好きなことをするのは近所迷惑なこと
も多い。そこで、近所迷惑をあまりにも恐れることになる、結局のところ、何も出来なくなる。近所
迷惑のことも自覚しつつ、それでも好きなことをやっていくところに、人生の面白味が出てくるもので
ある。

好きなこととして、「善行」をしたい人たちがいる。この人たちの一番困ることは、何しろ善いこと
をしていると思っっているため、近所迷惑についての自覚が薄いことである。

一例をあげてみると、老人ホームにやってくるボランティアの人が居る。やってくると、老人にやた
らに親切にする。老人の方もやはり誰かに甘えてみたいものだから、何やかやA「ヨウキュウする。それ
にに応じて、老人も嬉しくなつて、平素は出来ないことまでする。これは確かに素晴らしいこと
である。しかも、このような行為を、この人は無償でやっているのだから、ますますそれは「善行」
とすべきである。

しかし、こんな人が時たま来てくれると、施設の人たちが後で苦労することになる。甘えることの味
を覚えた老人は、次の日になると、今まで自分でしていたことまでしなくなつて、他人に頼ろうとする。
施設にいる人たちは、それにいちいち応じて居られないし、やはり老人と言つても出来る限りは自立的
に生きて欲しいものだ。

時には、この老人が、ボランティアの誰れさんは優しい人だけど、ここの施設の人は冷たい人ばか
りだ、などと言いだすかも知れない。こうなると施設の人には面白くない。そこで、ボランティアの人が
次に来たときは、あまり歓迎しない。そこで、「あれっ」と気がついて施設の人と話し合うようなボラ
ンティアは、本当に素晴らしい人だ。しかし、一般に「善人」は他人の気持にノーマークの人が多いの
で、そのまま平気でやつてくる。と言つても、ものごとには限度があつて、施設側から急に来所を拒ま
れたり、板ばさみになつてきた老人が急に無愛想になつてきたり、とかの破局を迎える。

こんなときに、せっかく善意で行つてやつているのに何だあの施設は、というので、そこをやめて、
他の所にボランティアに行く、というような

しかし、本当に善を行ないたいのなら、「微に入り細にわたつて行なわねばならない」のである。
施設の人の不機嫌を感じとったら、それについて考えてみる必要がある。老人が、あれをして欲しいこ
れをして欲しいと言つたとき、それにすぐ応じることが、本当に意味のあることか、と考えてみる必要
がある。それらのことをひとつひとつ取りあげ、考えてゆかないと、善が善にならないどころか、有害
なことにさへなつてくる。

そこで、頭書のような言葉が大切となるのだが、実は、これはウィリアム・ブレイクの「他者に善
をおこなわんとする者は、微に入り細にわたつておこなわなければならない」という言葉を短かく言い
直したものである。

5 いわゆる先進国の対外援助の実態などを見ていると、この言葉の重要性を「ツウカン」させられる。
沢山の金を使って、いろいろ物を送りこむのだが、それによって、その国は果して「豊か」になるのだ

ろうか。本来はその国に無かつた物を「キュウゲキ」に大量に送り込むことによって、その文化のもつて
いる基本的パターンを壊すようなことをしていいのだろうか。それは武器による侵略と類似のこととさ
え言えそうに思われる。

微に入り細にわたるような面倒なことはしたくない。ともかく善意でやっているのだから、と言う人
は、それは自分が好きでやっているだけのことで、賞讃に値しないどころか、極めて近所迷惑なこ
とをしているのだ、という自覚ぐらいは持つて欲しいと思う。ボランティア活動というのは、余程気を
つけてやらないと、逆効果を「生ぜしめたりするものなのである。

それが嫌な人は、微に入り細にわたつてやつて頂きたい。一旦それは始めると、善を行なうこと
がどんなに難しいことであるかがわかることであろう。自分では善と思つていても、本当はどうなの
はわからないと思えてくる。そうなつてくると、善人に共通する不愉快な傲慢さが少しずつ消えてく
る。善とか悪とかいうことよりも、自分の好きなことをさせて頂いている、ということが実感されてく
る。

(河合隼雄『こころの処方箋』より)

注1 平素：つね日ごろ。ふだん。

注2 賞讃：ほめたたえること。

注3 生ぜしめたりする：生じさせてしまつたりする。

問一 二重傍線部A「ヨウキュウ」、B「ツウカン」、C「キュウゲキ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 空欄Xに入ることをばとして、最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

A 綱渡り I 負け戦 U 猿回し E 渡り鳥 O 風見鶏

問三 傍線部1「それ」とは何を指しているか。「こと。」につながるように、本文中から十二字で抜き
出しなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問四 傍線部2「そこで、『あれっ』と気がついて施設の人と話し合うようなボランティアは、本当に素晴
らしい人だ」とあるが、筆者は老人ホームでボランティアをするとき、施設の人や老人たちにどの
ような心配りをするべきだと考えているか。具体的に書かれている連続する二文を本文中から抜き
出し、初めと終わりの五字を答えなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問五 傍線部3「施設側から急に来所を拒まれたり、板ばさみになつてきた老人が急に無愛想になつて
きたり、とかの破局を迎える」とあるが、なぜそうなつてしまうのか。最も適切なものを次の中か
ら記号で答えなさい。

A ボランティアの人が、老人のことを考えて身の回りの世話を熱心に行なつたため、老人が施設
の人よりボランティアの人の方を頼りにするようになってしまつたから。
I ボランティアの人が、老人が一人でできることまで代わりに行なつたため、これまで老人が自

分でしていたことも他人にやってもらおうとするようになってしまふから。

ウ ボランティアの人が、老人ホームにたまにしか来てくれないので、老人が寂しがるようになり、施設の人にやたらと甘えるようになってしまふから。

エ ボランティアの人が、老人の身の回りのことを、老人と一緒にこなおうとしたため、老人が施設の人にも「手伝ってほしい」と言うようになってしまふから。

オ ボランティアの人が、老人に優しく接したため、老人が施設の人よりボランティアの人の方を親切だと感じるようになり、施設の人たちのやる気が失われてしまふから。

問六 傍線部4『他者に善をおこなわんとする者は、微に入り細にわたっておこなわなければならない』とあるが、この言葉通りに行動したら何に気付くと筆者は考えているか。それが書かれている連続する二文を本文中から抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問七 傍線部5「いわゆる先進国の対外援助の実態」を見て筆者が考えたこととして適切なものを、次の中からすべて選んで記号で答えなさい。

ア 相手国が発展するためには、たくさんのお金や物資を援助する必要がある。

イ 相手国にはない物を一気に大量に送り込むと、相手国の文化が破壊される。

ウ 相手国を豊かにするためには、お金や物を送るだけでは不十分である。

エ 相手国を侵略するためには、たくさんのお金や物資を送り込むべきだ。

オ 相手国に武器を送ることは、相手国の発展を妨げることにつながる。

問八 傍線部6「善人に共通する不愉快な傲慢さ」とは何か。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 後になってから、ボランティア活動を行なう難しさに気付くこと。

イ 自分の行動は、相手のためになっていないかもしれないと考えること。

ウ 他人から誉めてもらいたいために、ボランティア活動を続けること。

エ ボランティア活動を、みんなも積極的に行なうべきだと思うこと。

オ 相手の都合を考えず、自分のやりたいようにボランティア活動を行なうこと。

問九 次の各文について、この文章の説明として正しいものには○、間違っているものには×をそれぞれ記しなさい。ただし、すべて同じ記号にした場合は採点の対象としない。

ア ボランティア活動は、自分では人の役に立っているつもりでも、他人の迷惑になってしまふことがあるので、やらない方がよい。

イ ボランティア活動をやりたがる人は、人の役に立っていると思ひ込んでいる人が多く、他人の迷惑を考えない人が多い。

ウ ボランティア活動は、お金をもらわずに行なっているため「善行」と言うべきであり、誉めら

れるべき行為である。

エ ボランティア活動をするときには、相手のためになっているのかどうかを常に考え、細心の注意を払って行なう必要がある。

オ ボランティア活動は、「自分の好きなことをさせて頂いている」という気持ちを持って、自分のために行なっていくのがよい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

朝陽がのぼりきると、霧も消えて、川面がキラキラと光りはじめた。雑草の生い茂った中洲から、白い鳥の群れがいつせいにばたいた。海はこっちだよ、と僕たちに教えてくれるみたいに、鳥たちは下流に向かって飛び去っていった。

途中から並んで自転車漕ぎながら、僕たちはいろんな話をした。小学校に入学してから昨日までの思い出を、トオルはびつくりするぐらいよく覚えていた。引越しの荷造りをしているときに、古いアルバムやクラス文集を見つけて、ずっと読んでいたのだという。

「丸四年とちよつとだけど、けっこういろいろあったな」

おとなみたくない方をして、「まあ、でも、どうせ忘れちゃうけど」と笑う。

アイガイとさばさばしていた。先週の学級会の時間に開いた『お別れ会』でも、いつもどおりよくし

やべつて、よく笑って、最後のあいさつも「お世話になりました、バイバイ」だけだった。

「転校って、緊張しない？」

「べつに」

「いじめとか……」

「だいじょうぶだって、オレ、野球もサッカーもうまいし、すぐに友だちでできるっていう自信あるもん」それに、とトオルはつづけた。

「今度の家は団地の四階だから眺めがすごくいいって父ちゃん言ってたし、町もここよりデカくて、デパートもあるって、母ちゃんも姉ちゃんも楽しみにしてるし」

だから、とさらにつづけた。

「オレも楽しみーっ」

僕は、ふうん、とうなずくだけで黙っていた。うつむくと、自分の影が見える。陽がだいぶ高くなつたせいか、影は出発した頃よりもくっきりしていた。

土手道から河原に下りて、弁当を食べた。

時刻は正午。出発前の計算では帰り道を走っているはずなのに、まだ僕たちは海にたどり着いていない。

時速二十キロなんて絶対に嘘だ。お父さん、でたらめなこと教えないでよお、と文句をつけたくなつた。海まで五十キロのほうも、いまになってトオルは「あれ？ 六十キロだったかなあ」と言いだした。

どうする――？

3 喉元まで出かかった言葉を、おにぎりと一緒に押し戻した。

ここまで来るのに五時間かかっている。いまずぐ引き返せば、疲れ具合を計算に入れても、晩ごはんにはなんとか間に合うだろう。

土手道はまだB延々とつづいているし、川の下流に目をやっても、海らしい広がりはまだ見えない。おまけに、さつきから少しずつ空に雲が出てきた。モコモコした入道雲でも、下のほうが暗くなっている。雨を降らす雲だ。それも、どしゃ降りの、かみなり交じりの。

どうする――？

ちらりとトオルを見ると、目が合った。

一瞬 A 表情を浮かべたトオルは、それを振り払うようにへっつと笑って、「なんだよカズヤ」と言った。「おまえ、あきらめちゃうのか？」

「……そんなことない」

「オレは、^{注2}野宿になっても平気だけだな」

「オレだって平気だよ」

負けずに言った。

僕たちはまた土手道に戻って自転車を漕いでいった。

風が出てきた。向かい風だ。トオルは口をあーんと開けて風を受け止め、「しよっぱかった」と言った。「海の風だよ、これ」

ほんとうだろうか。でも、海はもうすぐなんだ、と自分に言い聞かせて、ひととき強くペダルを踏み込んだ。

路面に落ちる影が消えた。

空は雲に覆われて急に暗くなり、さえぎるもののない土手道に強い向かい風が吹きつける。自転車のスピードが落ちた。ペダルを強く踏み込んでもなかなか前に進まない。ハンドルをまっすぐにするのがせいっぱいだった。

ヤバいぞ、夕立来そうだぞ、とトオルに声をかけようとしたとき、大粒の雨が落ちてきた。ひやつ、と首を縮めると、さらにもう一粒、二粒、三粒……あつという間に本降りになってしまった。

傘はない。雨ガッパもない。雨宿りできそうな場所も見あたらない。

「トオル！ どうする！」——怒鳴らないと、雨音に声がかき消されてしまう。

「突っ走るしかないだろ！」

トオルは自転車のスピードを上げた。

でも、そんなの無茶だ。雨はどんどん強くなる。大きな雨粒は、まるでブドウをぶつけられているみたいだった。風も強い。川面にさざ波まで立っている。

ゴロツ、と空が鳴った。かみなりだ。

「トオル！ ⁶雨宿りしよう！」

「怖いのか？ オレなんて、ぜーんぜん平気だぞ！」

そうじゃない。リュックの中に『ハックルベリー・フィンの冒険』が入っていることを思いだしたの

だ。雨はリュックの中にも染み込むだろう。本が濡れてしまって、ボロボロになったら……そんなの、嫌だ。

「本があるんだよ！」

「はあ？」

「いいから！」

サドルからおしりを上げて必死に自転車を漕いだ。トオルを追い越して、すぐ先の分かれ道で土手から降りた。土手の下はバスの走る広い道路になっていた。スーパーマーケットのCカンバンが見えた。よし。トオルもついてきている。僕は振り向いて、「おまえに持ってきて来た本なんだ！」と怒鳴った。

すると、トオルはB 顔になって、「オレも！」と怒鳴り返した。「オレも、カズヤに渡す本、持ってきてる！」

スーパーマーケットで、いちばん安いガムを一つずつ買った。レジのおねえさんがシールだけですませようとするのを、すみません、袋に入れてください、とお願ひした。本をレジの袋に入れて、それをバスタオルでくるんでリュックの奥のほうにしまっておけば、なんとかなるだろう。

スーパーの自転車置き場には、うまいぐあいに屋根もついていた。雨宿りをしながら、トオルに背中を向けて本をレジの袋に入れていたら、「オレに持ってきて来た本ってなんなんだよ」と訊かれた。「もったいぶるなよ。見せろよ、ほら」——せっかちな性格なのだ。

「トオルだって、オレに渡す本って、なんなんだよ」

「なんだっていいだろ」

「よくないよ。なに言ってるんだよ」

しばらく言い合ったすえに、二人同時に渡すことで話がまとまった。ほんとうは海に着いてから渡したかったけど、しかたない。トオルのほうも、ここで渡したくはなかったのか、不機嫌そうなしぐさでリュックを探っていた。だったら「やつぱり海に着いてからにしようぜ」とどっちかが言えればいいのに、⁷意地を張るとお互いにそれができなくなってしまうのが、なんというか、つまり、要するに……女子の言うように、男子ってバカでガキなのかもしれない。

「じゃあ、同時に見せっこしようぜ」

「うん……」

ガッツポーズと同じように、いっせいのつせつ、というかけ声なしに、僕たちは手に持った本を出した。

『トム・ソーヤーの冒険』と『ハックルベリー・フィンの冒険』が向き合った。

僕たちは^{注3}哑然として、呆然として、しばらくそのまま黙り込んだ。

先にプツと噴き出したのはトオルで、「なんだよーっ」と声をあげたのは僕だった。

「……もともとカズヤの本なんだから、返してやるだけだよ」

トオルはC 顔と声で言った。言いたかったせりふを先に言われた僕も「こっちもだよ」と口元をもぞもぞさせて言った。「だから、べつに、プレゼントなんかじゃないし……」

「わかってるよ、そんなの」
「オレだつてわかつてるよ」

「オレ、知らないから、カズヤが二冊とも持ってるよ」

「オレだつて知らないよ、おまえが両方持ってるよ」

「知らないって」

「オレも知らないって言ってるだろ」

僕たちはまた黙り込む。今度は、先に「まいっちゃったなあ……」と苦笑交じりに⁸首をかしげたのは僕で、トオルは「信じられねーよ……」とため息をついた。

結局、二冊は交換することになった。僕は『トム・ソーヤー』を受け取り、トオルは『ハックルベリー・フィン』を新しい町に持つて行く。トムとハックがトオルの本棚の中で並ぶ夢は消えた。トオルが思い浮かべていた、僕の本棚の中でトムとハックが並ぶ夢も、一緒に消えてしまった。でも、それもまあ……いいか。

交換した本をリュックにしまっていたら、先にリュックの蓋を閉めたトオルが、黙って自転車にまたがって、黙って外に漕ぎ出した。

雨はまだ降っている。かみなりは遠ざかってくれたけど、風はあいかわらず強い。

「ちょっと待てよ！ おい、トオル！」

あわてて追いかけた。でも、トオルは振り向きもしない。

土手に戻った。海に向かって、路面に溜まった水を派手にはね上げながら、トオルはさらに力強く自転車漕いでいく。まるで飛行機が滑走路で加速するように、ぐんぐんスピードを上げて、そして――。

「うおおおおおおおーっ！ うおおおおおおおーっ！」

吠えた。なんなんだ？ と驚いていたら、絶叫はやがて言葉になった。

「転校したくねえよおおおーっ！ オレ、転校やだよおおおおおーっ！」

僕を振り向かない。自転車のスピードもゆるめない。まっすぐに前を見て、びしょ濡れの背中を丸めて、叫びつづける。

「転校、やだやだやだやだやだーっ！ 引越したくないないないないーっ！」

僕は黙ってペダルを踏み込む。トオルの背中を追いかける。雨に煙る土手道を突っ走る。

（重松清『季節風 夏』より）

注1 中洲：川の中で、土砂が水面に出て平らな島ようになった所。

注2 野宿：野外に寝て夜を明かすこと。

注3 啞然：あきれて言葉が出ない様子。

問一 二重傍線部A「イガイ」、C「カンバン」をそれぞれ漢字に直し、B「延々」の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 空欄A、B、Cに入る最も適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一回しか使えないものとする。

ア さびしそうな イ 気弱そうな ウ あきらめたような
エ ムスツとした オ きよとした カ ぼーとした

問三 傍線部1「キラキラと」と同じ性質のものを次の中から記号で答えなさい。

ア 傷口がひりひりと痛む。
イ 紙をびりびりとやぶる。
ウ 大声でげらげらと笑う。
エ ドアをとんとんと叩く。
オ 犬がわんわんと鳴く。

問四 傍線部2「僕は、ふうん、とうなずくだけで黙っていた」とあるが、このときのカズヤの気持ちとして、最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア トオルと一緒に過ごした思い出をなつかしむ気持ち。
イ トオルが転校先でいじめられないかと心配する気持ち。
ウ トオルに新しい友達が早くできてほしいと願う気持ち。
エ トオルならすぐに友達をつくれると安心する気持ち。
オ トオルが転校に前向きな様子でいるのを寂しがる気持ち。

問五 傍線部3「喉元まで出かかった言葉」とあるが、どんな言葉を言おうとしたのか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 「時速二十キロというのは、間違いだったよ。」
イ 「海までの正確な距離を、ちゃんと調べてこいよ。」
ウ 「海までの道、間違えているんじゃないか？」
エ 「帰りの時間が遅くなるから、もう引き返そう。」
オ 「雨が降ってきそうだから、海はあきらめよう。」

問六 傍線部4「雨を降らす雲だ。それも、どしゃ降りの、かみなり交じりの。」という部分に使われている表現技法を次の中から記号で答えなさい。

ア 直喩 イ 隠喩 ウ 倒置 エ 対句 オ 体言止め

問七 傍線部5「ひとときわ強くペダルを踏み込んだ」ときのカズヤの気持ちとして、最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 海を目指すのをあきらめなくてよかったと、喜ぶ気持ち。
イ もう少しで海に着くということが分かり、安心する気持ち。
ウ 海の近くまで来たというのは本当なのかと、不安に思う気持ち。
エ いつの間に海の近くまで来たのだろうという、驚きの気持ち。

オ 雨が降り出す前に海にたどりつかなければいけないと、あせる気持ち。

問八 傍線部6「雨宿りしよう!」とカズヤが言ったのはなぜか。「から。」につながるように、本文中の表現を用いて十字以内で記しなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問九 傍線部7「意地を張るとお互いにそれができなくなってしまう」とあるが、具体的にどんなことができなくなるのか。「ができなくなる。」につながるように、二十字以内で記しなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問十 傍線部8「首をかしげた」の本文中での意味として、最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 考え込んだ イ 疑問に思った ウ 困ってしまった
エ 賛成しなかった オ 残念がった

問十一 傍線部9「トオルは振り向きもしない」のは、なぜか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 自分がプレゼントしようとした本を、カズヤが「いらない」と断ったから。
イ カズヤの本棚の中でトムとハックが並ぶという夢が、消えてしまったから。
ウ カズヤなら、どんなことをしてもついてきてくれると信じていたから。
エ 本音を言うときの自分の顔を、カズヤには見られたくなかったから。
オ 「転校したくない」という弱音を、カズヤにだけは聞かれたくないから。

問十二 この文章の表現の特徴として、最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 天候の移り変わりや風景描写が、登場人物の心情変化を効果的に描いている。
イ 視覚だけではなく、聴覚や嗅覚、触覚などの感覚を存分に使って表現している。
ウ 長めの一文を読点「」で細かく区切ったテンポのよい文体で書かれている。
エ 擬態語や擬音語、色彩を表す語を多く用いて、登場人物の心情を描いている。
オ 擬人法や比喻表現を多用し、豊かな自然が生き生きと表現されている。

平成二十四年度中学第一回二月一日		
解答用紙〈国語〉		
受験番号		
氏 名		
総合得点		

一

問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一				
ア			初め		初め			A				
イ												
										ウ		
オ	終わり	終わり	こと。	C								

一 合計

二

問十二	問十一	問十	問九		問八	問六	問三	問二	問一				
								A	A				
								問七	問四	B	B		

ができなくなる。

から。

二 合計